



# 雲の上にはいつも...



【No.1】藤城小学校 校長室より（不定期刊）

## ひとのことを思う・考える ⇒ 思いやりの心

藤の花が心地よい風に揺られ、初夏を感じる頃となりました。平成29年度の授業がはじまって、今日でちょうど40日です。1年生の皆さんを含め、そろそろ学校生活にも慣れてきたことと思います。

5月1日の朝会のなかで「思いやりの心をもって、生き生きと活動する子」という本校の教育目標について考えてみました。トイレのスリッパの脱ぎ方の違いの写真から、『ひとのことを思う・考える ⇒ ひとを大切にすること』を子どもたちが考えてくれました。子どもも大人も大切にされると嬉しいものです。学校をしあわせの場所にしましょうと締めくくりました。今は子どもたちが頑張り、下の写真のようにきれいにそろっていることが多いです。乱れているのを見つけたひとが、ごく自然にそろえる、そんな子どもたちに育ってほしいと願ってます。

さて、わが子を育てる中で、「うちの子は何べん言ってもわかってくれへん!」とか「勉強、ほんとにちゃんとやらへんし。もう、うちの子は!」など、悩み事は多々あるかと思います。しかしながらどうも私たちは無意識のうちに他の子と比べてみたり、0か100かみたいに極端なとらえ方をしていることが多い。

親として大切にしてほしいのは、わが子の失敗やまちがいを「認める」ことです。きちんと叱ったあと「許す」や「許さない」と迫るのではなく、「認める」こと。「認める」というのは親もいっしょにその失敗を背負うということです。

そこで、0か100かではなく、「1パーセントだけ頑張る」ように言ってみましょう。100頑張ろうとするから続きません。1パーセントならできそうですよね。はっきりしているのは、あきらめたらそこで終わり、変わることはないということです。たとえ1パーセントでも、努力を続ければ変わります。成長します。つまり、無駄な努力は決してないということです。



## 決してあきらめず「いま・ここで」頑張ること

こんな詩があります。 ※（原文にあった不適切ととられかねない用語については、他の用語に換えさせてもらいました。）

ごめんなさいね おかあさん／ごめんなさいね おかあさん／ぼくが生まれて ごめんなさい  
 ぼくを背負う かあさんの／細いうなじに ぼくはいう／ぼくさえ 生まれなかったら／  
 かあさんの しらがもなかったらね／おおきくなった このぼくを／背負って歩く 悲しさも  
 「かわいそうな子だね」とふりかえる／つめたい視線に 泣くことも／ぼくさえ 生まれなかったら



ありがとう おかあさん／ありがとう おかあさん／おかあさんが いるかぎり／ぼくは生きていくのです  
 脳性マヒを 生きていく／やさしさこそが 大切に／悲しさこそが 美しい／そんな 人の生き方を／  
 教えてくれた おかあさん／おかあさん／あなたがそこに いるかぎり

（山田康文 作） 扶桑社『お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい』 向野幾世 より

この詩の作者山田康文くんは、生まれたときから全身が不自由で話すことも書くこともできません。奈良の明日香養護学校に入学して、中学生の時に詩を作ることに挑戦しました。向野先生が投げかける言葉が康文くんの言いたい言葉と一致したら目をギュッとつぶりイエスのサイン、違っていれば舌を出してノーのサイン。こんな気の遠くなる作業を繰り返して、この詩は生まれました。出だしの「ごめんなさいね おかあさん」だけで、一ヵ月かかり、完成までには1年かかったということです。その間に、お母さんとのやりとりを経て、「おかあさん ごめんなさい」が「おかあさん ありがとう」に変わっていったのです。この詩の発表の2ヵ月後、彼は天国へ召されました。

「できない。ムリ。」とあって、やらないままでは、いつまでたってもできないのは当たり前。康文くんが私たちに教えてくれているのは、「やればできる!」「いま・ここで頑張るしかない!」ということなのです。